

東  
叢

此二

文獻		
數冊	序記	號書
五 二	一	滋 賀 縣 中 學 校

文



新刊吾妻鏡卷第三十二

嘉祐四年

戊戌十一月廿三日寫於仁元年

正月小

一 日

戊申

雨降今日燒飯

沙汰作御

御劍宮內少

輔泰氏

御調度

若狹守泰村

御行騰香大和守祐時等

持樂之

一御燕 相模式部大夫

同前本間式部彌

二御馬

相模六郎

橘右馬允

三御馬

上總介太郎

同次郎

四御馬

本間次郎左衛門尉

同四郎

五御馬

越後太郎

吉良次郎

二日 巳酉 埃飯在涼地 玄番頭基經 御行膳 肥後守為佐

御調度 玄番頭基經 御行膳 肥後守為佐

一御馬 北条左近大夫將監信濃三郎左衛門尉

二御馬 駿河五郎左衛門尉同八郎左衛門尉

三御馬 上野左衛門尉 同弥四郎

四御馬 近江四郎左衛門尉 佐木六郎

五御馬 吉北余五郎 南條七郎左衛門尉

御調度 遠江守 沙汰 橫右馬權頭政村

三日 庚戌 埃飯遠江守 橫右馬權頭政村

一御馬 遠江三郎 小井豆左衛門尉

二御馬 陸興七郎 廣河五郎

等持參之

一御馬 遠江三郎 小井豆左衛門尉

二御馬 陸興七郎 廣河五郎

三御馬 信濃三郎左衛門尉隱岐四郎左衛門尉

四御馬 小野寺次郎左衛門尉同四郎左衛門尉

五御馬 豊田太郎兵衛尉 同次郎兵衛尉

四日 辛亥 將軍家二所御精進始

九日 丙辰 二所御達設左京地供奉給御經供

養導師太納言律師隆辨云起不長野日大其如普

十日 丁巳 丑丸三浦駿河前司玄番頭告狹守

家村等依失火災云起不長野日大其如普

十五日 戊戌 霽午刻將軍家自二所遷御而科

計頭師貟毛利藏人大夫入道西阿玄番頭基經隱

岐合道行西加賀前同康俊等依召參達將軍家御

上洛事有評議為凜俊奉行御路次間條大事悉破  
召付奉行人等諸人不可漏供奉於信濃式部大夫  
入道行然者可候御留主云亦為師貞奉行召陰陽  
師祓問之來廿日御出門廿八日可有御進發而件  
日八龍也御出門之後者不可憚事數但同擇宜日  
可有御進發之由有申行之人可為何様裁可計者  
睛賢朝臣申云御出門之後強不及擇日次其故者  
暫有御坐于御出門之所者可准路次逗留之間也  
然而以吉日御進發又可宜恭來月二日三日可然  
日也此上猶可祓問當道歟云早披露此趣重可祓  
尋問當道之由左京也祓仰之間基經卷中御前不  
可有御延引之音仰切說云據源文四甲主薄門  
提

十九日丙寅御所心經會山川鑑御宿御宿御宿  
次日丁卯御馬始也今年依可為御物忌不可  
有此儀之由窮冬雖被定故祓遂之射手事昨夕俄  
於御前祓仰合于始義村爲催促祓下日記於陸  
與太郎云

射手同奉新表願人齊家良學無室禪

一番表願東鄰西鄰西鄰南鄰北鄰西鄰

小笠原六郎本姓王藤澤四郎子秀則

二番不詳田正政

正橫溝六郎

松里四郎

三番不詳大原文澤門

四門邊左衛門四郎

本間次郎左衛門尉

四番

三浦又太郎左衛門尉 秋葉小三郎

五番

下河邊右衛門尉

山田五郎

午刻將軍家休可有御上洛爲御出門入御于秋田城介義景甘繩家被召御輿御立烏帽于御直垂也供奉人行糸同奉摸其體云入夜左京地并室家御出門于駿河守有時弟

廿八日 乙亥天嘗缺將軍家御上洛寅冠先賜賢案勤御身固今日八龍日也斯有其難懲之由雖有傾申之族御出門之上者不可及日次沙汰之旨被仰無御許容云已刻進發被用御輿護持僧岳崎法

印成源栗真御驛者公覺僧都隆辨律師賴曉律師醫道施藥院使良基朝臣陰陽道前大藏權大輔泰貞散位晴賢朝臣隨兵以下前後供奉入參進發之處匠作未及御出門立刻有國碁會左京地頻被勸申之而被杖候入等之未被整族具云仍京地被杖野箭行騰等之後酉刻進發給國魁者御酒勾驛護持僧弁醫陰兩道之輩宿被點御所近邊同難事送夫等者為加賀前司奉行涉云玄蕃源房丈  
廿九日 今夕入御藍澤驛高通井轉過方丈云

二月大

一日 丁丑 天晴 風烈申一點著御車返牧御所  
二日 戊寅 天晴 大風舉塵蒲原御宿高通井轉過方丈云

三日 巳卯天霽 手越御宿為左京地御沙汰被  
儲御所又左京地室上洛給今日被立鑑會

四日 庚辰天霽 嶴田

云日

五日 辛巳晴 懸河御宿為匠作御沙汰仰塗江  
國御家人等並被造御所橫地太郎兵衛尉長直為

奉行

云日

六日 壬午霽 今曉諸人乘替以下御出以前進  
發撃玉霸之忠不及孤疑欲競渡天龍河之間浮橋  
可破損數雖加制敵不拘之由奉行人橫地太郎兵  
衛尉長直等馳申仍左京地靈鳴之程於懸河宿到  
于酒邊著座敷皮雖不令發一言給諸人成礼猶豫  
自然令靜謐訖將軍家御通之後乘馬供奉

云此河

水械落供奉人所從等者不能渡浮橋又無乘船沙  
汰大半渡河承僅及馬下腹云酉刻入御池田宿

七日

癸未霽 着御橋本驛先之人之點定家之

間隣與太郎實時主官于舞澤松原及成刻京地今  
聞彼野宿事給被仰曰實時者小侍別當並職異他  
尤可候于御所邊之仁也而依無其所止宿驛上者  
予暖座於里卷之條有其恐云仍令到于陸與太郎  
野宿之間宮內少輔泰代駿河前司義村以下人多  
多以辯拂旅宿委件松原還為諸人之煩早可令入  
本許給之由各申之又遠山大和守辯旅店御所招  
請陸與太郎之間京地禪人之札令歸本宿給太郎  
主施面目宿于和列本所云日

主施面日宿于和列本所

云日

五

八日 丙申 寅魁以後小雨日出屬晴未刻又雨

降著御豐河宿及深更風雨甚

九日 乙酉 霽 矢作宿人御于足利左馬頭亭依

去夜風雨洲侯近兩河浮橋流損云

十日 丙戌 晴 豊津御宿交趾將軍家俄御不例

御礮亂歛諸人驚嚇醫師侍長炳醫術之懶小選令

襖本御仍賜御劔京地令引御馬給云

十一日 丁亥 晴 今日還留于豊津宿依夜

御不例餘氣也其後修理兩河浮橋云

十二日 戊子 霽 小隈御宿

十三日 己丑 天晴 垂井

十四日 庚寅 陰 小脇

十五日 辛卯 天晴 野路

十六日 壬辰 天霽 從五位下行隱政守藤原朝

臣行村法師法名昭卒年八

于時在伊勢國益田庄此

間向彼所云今日將軍家御逗留野路驛明日御入

洛之間依被定隨兵已下行列也小侍所別當陸奥

太郎實時往供奉人被持衆之匠作京地於御崩令

定左右給之後被返奉行人云所被載將軍家御判

於件散狀端也

十七日 壬辰 天賴快晴 朝御出野路宿先隨

兵以下供奉人自度上空路次二行座列寄御典之

後騎馬陞轎御以下於關寺邊見物云才刻御入洛

著于六波羅御所毋同

給

行列

先駿河前司隨兵

三騎士三十六人為隨兵

一 番 大河戸民部大郎

大湊賀八郎

二 番 隨銃井左衛門太郎

同次郎

三 番 隨三浦又太郎左衛門尉

同三郎

四 番 武小次郎

同三郎

山田藏人

同又次郎兵衛尉

同三郎

五 番 同秋葉小三郎

山田六郎

同五郎

六 番 多々良小次郎

同次郎兵衛尉

青木兵衛尉

七 番 安西大夫

金摩利太郎

八 番 九六郎太郎

三浦佐野太郎

石田太郎

九 番

石田三郎

三原太郎

十 番 市兵衛次郎

長尾平内左衛門尉

同三郎兵衛尉

十一 番 平野兵衛尉

遠藤兵衛尉

十二番 駿河五郎左衛門尉 同八郎左衛門尉

三浦次郎

駿河前司

馬部從  
人二在前

御所隨兵百九十二騎

三病指各弓袋差

一歩走三人

人在前

一番 小林小次郎

真下右衛門三郎

二番 猪俣左衛門尉

在原七郎三郎

三番 沢勾野内

三番 二宮左衛門太郎

同三郎兵衛尉

四番 池上藤兵衛尉

小串馬允

五番 春日部三郎兵衛尉

品河小三郎

六番 高山五郎四郎

江戸八郎太郎

七番 同高澤弥四郎

大胡左衛門次郎

母佐四郎藏人

八番 都筑左衛門尉

同左近將監

遠藤左衛門尉

九番 山内藤内

同左衛門太郎

十番 西条與一

伊勢藤内左衛門尉

十一番 小野寺小次郎 左衛門尉 同四郎 左衛門尉

十二番 紀伊次郎 左衛門尉

園田弥次郎 左衛門尉

同次郎 兵衛尉

十三番 忍穂六郎 左衛門尉 和田 左衛門尉

十四番 秩父左衛門太郎

倉賀野兵衛尉

十五番 中澤小次郎 兵衛尉

同十郎 兵衛尉

十六番 小河左衛門尉

河原右衛門尉

立河兵衛尉

十七番 阿佐義六郎 兵衛尉 塩谷民部六郎

十八番 福原五郎 太郎

下河邊左衛門尉

新開左衛門尉

十九番 中野左尉門尉

侯野弥太郎

二十番 四方田三郎 左衛門尉

塩谷六郎 左衛門尉

蛭河四郎 左衛門尉

二十一番 植間左近將監

多賀谷太郎 兵衛尉

二十二番 本庄四郎 左衛門尉

西条四郎 兵衛尉

泉田兵衛尉

女三番 中村五郎左衛門尉同三郎右衛門尉

女二番 加治新左衛門尉

女四番 阿保次郎左衛門尉加治丹内人衛門尉

女一番 同次郎兵衛尉直

女五番 飯富源内

女一番 那須左衛門太郎

女六番 建三郎

女七番 大本間次郎左衛門尉佐野三郎左衛門尉

女八番 高田武者太郎

女九番 長掃部左衛門尉

女十番 小河三郎左衛門尉

女十一番 三村兵衛尉

女十二番 木戸次郎左衛門尉

女十三番 長右衛門尉

女十四番 長兵衛三郎

女十五番 豊田次四郎

女十六番 須賀左衛門太郎

女十七番 高山次三郎

女十八番 矢口兵衛次郎

女十九番 兼良又次郎

女二十番 同少次郎

女二十一番 織藤三郎左衛門尉

同四郎左衛門尉

女二十二番 伊津八郎大郎

中村縫殿助太郎

女二十三番 菊原連判官代

同正平

卅五番 佐竹八郎

結城五郎

卅六番 大曾祢太郎 兵衛尉 同次郎 兵衛尉

武藤左衛門尉

卅七番 長三郎 左衛門尉 長太右衛門尉

長内左衛門尉

卅八番 善右衛門次郎

布施左衛門太郎

卅九番 得江藏人

平賀三郎 兵衛尉

四十番 得江三郎

登間左衛門尉

出羽四郎 左衛門尉

四十二番 壱岐小三郎

足立木工助

四十三番 佐原太郎 左衛門尉

下總十郎

四十四番 千葉八郎

相馬左衛門尉

四十五番 内藤七郎 左衛門尉 押毎三郎 左衛門尉

春日部左衛門尉

四十六番 近江四郎 左衛門尉 豊前大炊助

加治八郎 左衛門尉

四十七番 佐竹六郎 次郎

豐前大炊助

四十七番 武田五郎次郎 仁科次郎三郎

小野澤左近大夫

四十八番 宇都宮新左衛門尉 氏家太郎

筑後左衛門次郎

四十九番 和泉新左衛門尉 同五郎左衛門尉

和泉左衛門次郎

五十番 佐原新左衛門尉 同四郎左衛門尉

同六郎兵衛尉

同三郎 大井太郎 南部次郎

五十二番 宇佐美與一左衛門尉 弥次郎左衛門尉

關左衛門尉

五十一番 上總介太郎

五十三番 必輔左近大夫將監 同木工助

上總介太郎

五十四番 筑後圖書助 安積左衛門尉

伊藤三郎左衛門尉

五十五番 佐渡二郎左衛門尉 同三郎左衛門尉

同帶刀左衛門尉

五十六番 宇都宮四郎左衛門尉 同五郎左衛門尉

梶原右衛門尉

五十七番 加藤左衛門尉 河津八郎左衛門尉 河越錦部助

五十八番 小山五郎左衛門尉 宇都宮上条四郎 宮内左衛門尉

五十九番 伊豆守

武田四郎

小笠原六郎

六十番 藥師寺左衛門尉

淡路四郎左衛門尉

六十番 上野七郎左衛門尉

毛利藏人

六十番 陸興五郎太郎

毛利藏人

六十番 那波次郎藏人

宇都宮修理亮

六十番 若狭守

越後太郎

六十番 遠江式部桑

北條左近大夫將監

六十番 相模三郎

北條左近大夫將監

六十番 宮内少輔

北條左近大夫將監

次御甲著一人

小國三次御曾持一人

次御小具足持一人

次御引馬一疋

次步走被召人取等三十人

次御引馬一疋

次御乘替二人

童野候御與右大浪去備門

次御鞍河守

備前守 右馬權頭

二番 長沼淡路前司

大河戸民部大夫 大和守

三番 天野和泉前司

玄番頭 远佐原肥前七司

四番 肥後前司

江判官 伊賀判官

五番 出羽判官

壹岐大夫判官 周幡大夫判官

六番 左京權大夫

附其外侍龍勢不可勝計

後陣

修理 権大夫

隨身三十人着水干侍其外卡龍鳴之等

十

廿二日 戊戌 天晴 將軍家始御出

御直衣陰陽

頭雜範朝臣候御身固先太相國御亭次御參一条

殿今日不及前駕沙汰右馬權頭政村被候御車前

云

一行列

先右馬權頭政村

次御車

八葉

宇田左衛門尉

四方田五郎

左衛門尉資經

小宮五郎左衛門尉

本相

次郎左衛門尉信忠

平左衛門三郎盛時

富所左衛門尉

一安

若兒玉小次郎

小河三郎兵衛尉真行

參河三郎左衛門尉

飯富源内長能

次衛府八人

各布衣帶錦騎馬奇戲水第

一番 内藤七郎左衛門尉威經

平文

東安積六郎左衛門尉祐長

二番 阿津八郎左衛門尉尚景

吉野大支

豐後四郎左衛門尉忠經

訛福

上野七郎左衛門尉朝廣

大助

駿河四郎左衛門尉家村

四番 芳渡帶刀左衛門尉基政

五番 並江四郎左衛門尉氏信

次高庭殿上人

左近中將親季朝臣

廿三日 巳亥 雨降今日將軍家衆參內自一条  
殿被差遣前駕三人日中以後御出

行列

先前駕

右馬權頭政村 治部權大輔 兼承

宮內少輔泰氏

左馬權頭威長

備前守朝直

皇太子宮權大夫茂能

次御車

八葉

小河三郎兵衛尉

小宮左衛門次郎直家

本間次郎左衛門尉信忠

平左衛門三郎

四方田五郎左衛門尉資經

若兒王小次郎

飯富源內

修理進三郎宗長

夫一 跡上著直垂令帶劍御車左右

次衛府十人

各布衣疋錦

大源左衛門尉

衣疋不車和泉

次郎左衛門尉景氏

宇都宮四郎左衛門尉賴業

立而雙大旗

河津八郎左衛門尉尚景

立而雙大旗

肥前太郎左衛門尉胤家

立而雙大旗

佐渡帶刀左衛門尉基政

立而雙大旗

藥師寺左衛門尉朝村

立而雙大旗

三浦又太郎左衛門尉氏村

立而雙大旗

信濃三郎左衛門尉行經

立而雙大旗

大字佐美藤内左衛門尉祐泰

立而雙大旗

次駕上八

左近中將親季朝臣

入夜被行小除日將軍家任權中納言今兼右衛門

替給

廿六日 壬寅

將軍家令補檢非違使別當給

廿八日 甲辰

天寶

將軍家被奉御馬於公家

一御馬

大和前司祐時安積六郎左衛門尉祐長

二御馬

大和守景朝 河津八郎左衛門尉尚景

以上四人引之

各布衣帶鉢

今日中納言等御殊賀也為御出立御覽大殿渡御  
六波羅殿於門外御下車是爲希代事則被差進前  
駕五人云

先一員

備長安利

府生爲末

大和志二年

少志家平

次前駕

右馬權頭盛長

宮內少輔泰氏

刑部少輔家盛

備前守朝直

治部權大輔兼康聲

右馬權頭政村

皇后宮權大夫茂能

駿河守有時

中務權少輔時長

越後守時盛

次御車

御車三乘

丹治部右衛門尉

小河兵衛尉

同左衛門次郎

本間次郎左衛門尉

平左衛門三郎

四方田五郎左衛門尉

立洞三郎兵衛尉基泰

富所左近將監

池上藤士康親

飯富源内

以上十人着直垂帶劍候御車左右

先行

看替長四人

火長四人

雜色御役

次衛府二十人下鷹寫先

大見左衛門尉實景

宇佐義與一左衛門尉祐時

宮內左衛門尉公景

宗宮內五郎左衛門尉

淡路四郎左左衛門尉時宗

中野公盛

大角藤三郎左衛門尉祐經

武藤左衛門尉景賴

加藤左衛門尉行景

上野七郎左衛門朝廣

信濃三郎左衛門尉行經

時宗

三近江四郎左衛門尉氏信

葛原六郎左衛門

出羽三郎左衛門尉光家

時政

肥前四郎左衛門尉光連

時政

壹岐三郎左衛門尉時清

關左衛門尉政泰

佐渡帶刀左衛門尉基政

時政

小山五郎左衛門尉長村

大曾祢兵衛尉長泰

三浦遠江次郎左衛門尉光盛

時政

三浦駿河四郎左衛門尉家村

時政

次官人

主馬大夫判官家衡

次隨兵十人三病相並一駒

一番 北条左近大夫將監經時 相模六郎時定

足利五郎長氏

二番 三浦參狹守泰村 守都宮下野守泰經

秋田城介義景

三番 武田六郎信長 小笠原六郎時長

千葉八郎彌時

寅末 上野五郎重光

次毫徒公叅二人

宰相中將實雄

三位中將公經

次殿上人五人

左中將實光持四季卦二條少將孝定

權中將親季近衛少將實膳

以上乘車

左少將為氏尉

大九日 天乙巳 天睿

大理總始也檢非遣使尹大

人皆參其中五位尉八人

大理出御各遂而拜云

及晚將軍家鄉參內供奉人同去廿二日至曉更渡

御于前右府并准乞御亭

云

冊日 丙午 邉一點將軍案還御六波羅

閏二月小

三日 己酉天霽 依御招請將軍家渡御大相國

緇閣御亭御儲被盡美御贈物風流棚脚置  
入夜還御六波羅

七日 壬丑天晴 戌刻佐安半東洞院失火南北

二町餘災

十三日 巳未霽 午刻日有重暉陰陽頭維範朝  
臣帶繪圖寂前馳榮六波羅殿殊申可有御慎之由  
其後權天文博士李尚朝臣以下兩三人應召參上  
被下維範朝臣所進圖可勘申所存之旨被仰之間  
強亦重變去建保年中道昌朝臣申於水無瀨殿白  
虹貫日之由委聞之時孝重朝臣申敗之變者今暉  
也云今夜維範朝臣奉仕天地災變御祭伊勢前司  
定貞奉行之云

十四日 庚申 雨下終日不休止雖有重變卅日  
中降雨者可消歟之由泰貞朝臣兼申之云

十五日 辛酉大晴 戌刻維範朝臣又參六波羅  
殿太白犯昴昴歲星犯半畢之中之仍為將軍御祈  
被行屬星祭在衝朝臣奉仕之戌四刻樋口町邊燒  
亡

十六日 壬戌 未尅鞍馬寺燒亡失火云自小堂  
火出來當寺者桓武天皇御宇延暦十五年丙子藤  
原伊勢人依貴布称明神之告草創以降星霜既三  
百八十餘年專為帝都擁護精舍云夫惠計妙

三月大

七日 壬午天晴 將軍家令任權大納言給又去

皆別當給今日御不列御減之後御沐浴醫師時長

朝臣視候

十八日 壬巳

海老名左衛門大夫忠行被止位

記宜為本官左衛門尉之旨宣下是不蒙關東御

免令直委叙爵之間依有其沙汰也

十九日 甲午

自去夜深更及辰尅雨降持軍家

渡御北山別業亭主并一條殿前右府以下自去夜

於此所被候待有御真遊等半更還御六波羅

元

廿二日 丁酉陰

貌雨降今日於六波羅殿屈南

北二京碩學波行仁王八講大殿准后為御聽聞入

御

云

廿三日 戊戌

雨降未三點大風人屋皆破損庭

樹參吹折中馳屬晴西風又烈御講結願願障  
也今日相模國深澤里大佛堂事始也僧淨光令勸  
進尊卑繙素正此營作

元

廿四日 壬卯

今日春日行幸也

廿五日 乙巳

小山下野守從五位下藤原朝臣朝

政法師

魏名率年十四

病患不經幾日數去比舍第上

野入道日阿相共南鄰金登壇受戒

元

廿六日 四月小

丁未 三浦守狹守泰村二階堂出羽守行

義等破名加評定衆之由被仰下各領狀

元

六日 辛亥天霽

將軍家勅授事有宣下

七日 壬子晴陰

將軍家有大納言御拜賀之儀

舊從公邸嚴上人連軒前駕以下同中納言御拜賀之時云

九日 甲寅天晴

今日天台座主

惠源僧正

將御

拜堂

十日

乙卯天霽

一條殿御息若君

福王公

將入

室于仁和寺御室

給大殿御同車君達右府良

幕

下貴

將軍家御

急從後車雲客濟之焉件若君日

室來將軍家御

猶子也忽被變其儀訖臣下御入室

希代之例也及晚還御

及深更小雨降今日將軍家御

直衣始

及深更小雨降今日將軍家御

十六日

辛酉天霽

賀茂祭也將軍家御見物之

十一日

丙辰陰

及深更小雨降今日將軍家御

間每事花美超例年則御家入

外尉能行家平基政光重賴業等凌大路

十八日

癸亥天霽

將軍家令辭權大納言給

廿四日

己巳雨降

一條大殿御兵仗御辭退被下

准三后宣旨即又令辭之給

將軍家令辭之給

元

元

廿五日

庚午雨降

今日一條殿於法性寺殿被

遂御素懷御戒師

飯室前大僧正

良狀九

系

喚師里

時法印

深御剃手法印

圓攝政殿以下濟之群

衆將軍家令參御

五月小

四日 戊寅晚陰

及晚自將軍家被調追昌蒲御執鏤金并御扇等於公家

云

件御枕者為六位定役

謂進者也而依波求御進物之次如此云

五日

已卯歲刻太白犯軒轅大星希代變異也

見于延喜天曆二代御記云今日坊門大納言入道

殿可令謁申之由雖被示遣于左京兆稱風氣辭退

云是承久兵亂之時被憲門罪科半左京兆殊依被

加潤色為故二品并右京兆等計被宥之間為報

其事今及此儀云京地兼得其意不舍向給云

十一日乙酉故左衛門尉坂上明定子是左兵

衛尉明胤領掌亡又遺跡事不可有相違之由含嚴

吉是石見國長田保幡磨國巨曾庄地頭職河內國

壁御作奉行近江國天福寺地頭等事云去年十

月四日父讓之死去明定休為若人左京兆頻憐愍

送孫給

云甲子年新

十六日庚寅今日將軍家渡御右府御亭御與

遊家中若君福王所劍給之卜鳥飛去自籠內在庭

前撫之稍若君周章給之間諸大夫侍等錯馳走無

所于欲取或雲客申云將軍家御共大略勇也召

莫中弓上手可令射取之給云仍若宮參御前申此

由給此事將軍家殊有御恩慶撰小冠召上之上野

十郎朝村世鳥不死之様可射取之由被仰含朝村

不能辭申取弓與引同進寄于樹下彼木枝葉尤茂

小鳥之姿僅雖見于葉之隙枝差遠弓非養由者輒

難獲之歟朝村蹲踞庭上取小刀削久引目之柱

之後挾之數丈窺廻樹下諸人見其氣色敢不憚

發箭鳥止聲箭落庭上朝村即持參件箭鳥所入于引同內也削捨目柱車此用意也被人籠中之慶動

尾羽疊鳴堂上堂下底嘆之聲滿耳將軍家令解御

衣給亭主被召出御劍各為朝村經頭云

十八日壬辰相摸國深澤里大佛御頭奉舉之

周八丈也

廿日甲午陰晴今日以將軍檢家人左衛門步尉藤原時朝弓藤原朝村号上野等被加前右大臣

臣家普光御簡衆於朝村者依威射藝給及御所望

五月戊申天霽將軍家御樂春日社申社雨降

六月大

刀添更雷鳴降雹御出行列

先駿河前司隨兵六騎

一番長尾平內左衛門尉景茂

同三郎兵衛尉光景

二番駿河四郎左衛門尉家村

三番駿河五郎左衛門尉資村

同八郎左衛門尉胤村

先伴駿河前司義村

次御所隨兵三十騎

一番河內守光村

千葉八郎胤時

一一番 下河邊右衛門尉行光

關左衛門尉政恭

三浦又太郎左衛門尉氏村

三番 佐渡次郎左衛門尉基親

佐竹八郎助義

相馬次郎左衛門尉胤經

四番 木家太郎公信

大曾祢兵衛尉長泰

壹岐三郎左衛門尉時清

五番 諏訪圖書助村家伊東三郎左衛門尉祐經

宁佐義與一左衛門尉祐時

六番 遠江次郎左衛門尉光盛

和泉次郎左衛門尉景氏

加藤左衛門尉行景

七番 武田六郎信長

大井太郎光長

八番

若狭守泰村

秋田城介景

近江四郎左衛門尉氏信

丹波守景

九番

相模六郎羽定

足利五郎長政

河越掃部助泰重

不輕守景

十番 北条左近大夫將監經時

不輕守景

遠江式部大夫光時

陸奥掃部助實時

政御興

以下如御入洛時

相智

池上藤兵衛尉康光

江戸八郎太郎景益

山内藤内通景

品河小三郎寶貞

相智

池上藤兵衛尉康光

中澤十郎兵衛尉成經

相智

本間次郎左衛門尉信忠

小河三郎兵衛尉直行

阿保次郎左衛門尉泰實

猪俣左衛門栗範政 四方田五郎左衛尉資經

本庄新左衛門尉朝次 修理達三郎宗長

平左衛門三郎盛時 立河三郎兵衛尉基泰

在原三郎貞政

以上下五人直垂帶叙列步御與左右但各五人  
令結番毎經行程二里互休息

次署水干人

一番 相模守重時

武藏守朝直

左馬權頭政村

宮內少輔泰氏

二番 越後守時盛

甲斐守泰秀 下野守泰經

三番 玄蕃頭基經

壹岐大夫判官泰經

豐前大炊助親秀

宇都宮判官頼葉

四番 日肥後前司薦佐

江大夫判官祐行

出羽判官家平

五番 大蔵少輔景朝

伊賀左衛門大夫光重

後藤佐渡判官基政

六番 和泉前白政景 大和前司祐時

信濃民部大夫行泰

後陣 左京權大夫

修理權大夫

已上兩所後騎數百人相列如雲霞此外人之從  
類或擣前路或追成群

六日 巳酉天霽

日中雷雨今日將軍自春日社

還御

七日 庚戌天霽

遠江三郎時長主補藏人象内

之間布衣侍五人雜色一人一不童一人相具之今  
日即任右衛門權少尉云

九日 士子天紀伊國日前官營作事付成功而可  
造畢之旨依被宣下將軍家所令舉申給之任人等  
于今不追其功之間有社司之誅仍無未濟可致沙  
汰之由被仰下云

十日 癸丑加賀前司康俊依所勞麤怠辭申問  
注所執事之間以于息民部大夫康持可為其替之  
旨被仰下云

十四日 丁巳前加賀守從五位上三善朝臣康  
俊卒年七

十九日 壬戌為洛中警衛止辻々可懸籌之由

被定仍被充催役出御家人等云

廿三日 丙寅禪定殿下若君福往於仁和寺有  
御剃髮之儀云戊冠北邊燒亡云苦寺故望難  
廿四日 丁卯終夜雨降今日土御門大納言通

方薨年左京兆令訪之給云悲慕葬事

廿五日 戊辰雨降終日不休且大風霽虛洪  
永人屋多破損梅尾清瀧河邊地出云

廿六日 己巳天晴今日攝政殿宇治入延引依  
去夜雨洪水之故也

廿八日 辛未晴晚頭雷雨今日任大臣召仰述  
引來月可被行之云

二日壬子乙亥天晴 午尅以後降雨今日任大臣召

仰

九日癸丑午晴 部今日攝政殿宇治入也舊從殿上

數十人公孤一人誦第大納言殿詔

十一日癸未天霽

寅魁熒惑與鎮星同變之由司

天之輦舉

勸文解事前請西臺出

十一日

甲申

左京兆密乞參園城寺給是去年

當于禪定二位身一十三年御忌景爲奉報波恩德

聚鑑倉所破終書功文一切經五千餘卷今日又迎

伴御妻忌被奉納于康院靈塲也當寺著聖靈之

御歸依施主御渴御異他所云每經卷之與令加左

京兆署判給云

十六日己丑天晴羣將軍家令蒙本座 宣旨給

云

十七日庚寅小雨降

准后禪定殿

下於法性寺

殿令落飭給御戒師飯室僧正良快

云

六日癸巳霁

今日任大臣節會左大臣良右大

臣實內大臣家

云

廿三日丙申晴陰 成尅小雨降今日卯一刻將

軍家御參石清水八幡宮牛尅還御

廿五日戊戌晴

法性寺禪定殿下御出家後始

御參內前駕四人坊官四人繻素後車各一兩云

廿七日庚子

大波羅御造營所侵事無沙汰之

國云相交之間有甚沙汰早乎令辨償之由今日被

下云

八月大

二日 甲辰 將軍家薦令果年來御願給於春日  
社壇被供養一切經道師東北院僧正圓玄題名僧

百口 云

十八日 庚申 終日雨降入所御靈祭延引 云

十九日 辛酉 雨休止然而時又時雨瀧山城  
國惡黨新平太召禁之處逐電訖仍付在所可生脣  
之由被相觸山城死等主人又可止雙六之由被仰  
下 云 今日御靈祭也將軍家於令出何殿御見物問

渡物風流結應異例 云

廿五日 丁卯 持軍家令參賀茂祇園北野吉田

等社 云

云

九月小

一日 癸酉雨 出左京先御亭被始行七箇夜大  
土公祭今夜恭貞朝臣奉仕之清基家氏晴茂國繼  
親艤等朝臣被結齋之 云

九日 辛巳 寅刻太白犯大微右執法星月時熒  
惑犯軒轅戌刻月犯歲星 云 又自亥刻迄丑時

流星或七八尺或三四尺不知其負色白赤今日為  
齊藤兵衛入道淨圓奉行地頭間事有被經涉汰之  
條之所謂云本公司跡云新補率法不可混亂兩様之  
由下知之處不叙用出違犯者改易其所可被充行  
勲功未給之輩次令補地頭之輩或肖先例或違久

祖例之由訴訟之時不從御下知者召其所可充行  
宮社忠勞之輩并所知替次御祈勤仕人跡事有  
如先條之于細者其所可充給他入云

十一日 壬未 山城國中庄園御保惣黨等事殊

可禁過由有沙汰云

十三日 乙酉 今夜明日得霧在京光先年冲在

宗有令對面給之人御懲志于今不等閑以月與為  
媒被遣一有御歌

ミヤコニテイモカハラヌ月影ニ昔ノ秋ラウツシテツソ

十八日 癸庚寅晴 子魁殿下北政所御流產君七

箇月云

十九日 辛卯晴 右 馬權頭政村為將軍家御使

被參殿下依令訪申去夜御事矣也

廿日 子辰 賀茂別當社領近江國安曇洲御厨  
内藤江村事可止使入部之由被仰守護人近江入  
道虛假是依敬神之異他也

廿二日 甲午霧 初齊宮令入野宮御云

廿四日 丙申晴 辨僧正定豪入滅去年補東寺  
長者不經樂旬月云是民部少輔源延俊男兼豪法  
印入室灌頂第子也

廿七日 己亥霧 御家人任官事所望之輩可令

減納成功之由相議之旨計有其聞今日被經沙汰  
可停止云凡成功之官職之外不可有御舉之趣彼

定云御在洛之次望官位僕多之又有御吹舉仍

爲固而後之法及此評定詮句勘者相摸三郎入直

真昭也

十月大

三日 甲辰陰晴

入夜甚雨今日鞍馬寺上揀持

軍家有御奉加馬三疋綬砂金等也酒越掃部助  
爲御使

云

四日 乙巳雨下 松殿禪定殿下師家於天王寺

薨云今日南都江侶武藏得棄墜圓補東大寺別當  
轍是去冬年南京衆徒蜂起驅動時竭忠節於關東  
之間可被行勸賞之旨休有兼日約諾也當奉前別

當賴曉得業者彌置卒久兵亂張本秀康子息刺掠

領山邊庄其過已重疊可改易之由被觸仰東大

寺別當僧正坊之處件寺者爲賴曉別相傳祚本所  
成敗休其事之咎於沒收者直可有御沙役之旨就  
被報申及此御計

七日

戊申

松殿薨給事前武州訪今申遺跡給

小野澤左近大夫付實為御使

云

十一日 壬子

丹後國曾我部庄者依為後白河

所法華堂領不被補地頭仍可停止守護使入部夜

討以下事出來之時者庄家糺明犯否可召度其身

之由今日被施杖前並歲守故右幕下御遺命殊被

重彼法華堂事之間令申行給之

云

十二日 癸丑

將軍家御染內

御直衣

右馬權頭

盛長刑部少輔家盛等供奉發車親李朝臣也其後

凌御一條令出河兩御亭明日可有御下向關東之

故也於一條殿御贈物繁多也捨遺納言行成真筆

古今和歌集雅忠朝臣相傳醫書本其内云今日

畿內西國中庄園殊保住人好以強霸博奕刃傷殺

害為業輩事不嫌禪社佛寺權門勢家領不相觸召

取其身且可注連在所之中破仰含守護人等云

十三日 甲寅天霽 寅一點將軍家關東御下向

御進發也御持僧禮時僧正成源醫師良基暗畏等

朝臣也陰陽師泰貞時賢等朝臣又陰陽頭維範朝

臣被否具之忠尚季尚在直等朝臣候御身固前後

陣供奉人隨兵等同鄉入之時但各行粧花義軼前

儀大相國禪閣於四官河原御見物搔河大納言寶

於大津浦設立車甚外殊相雲客車不可勝計凡  
見物縞素以面為襦而冠着御小脇驛近江入道虛  
假立御所奉入御儲結構無比類云

十四日 乙卯晴 匠係前武州令參旅御所給可

然宿老多改著座小侍及奴酌數缺佐野木工助俊  
藏等候陪膳虛假獻御引出物云巴剋止御未以後

雨降日斜箕浦御宿

十五日 丙辰 未魁垂井御宿

十六日 丁巳 申魁 小隈御宿

十七日 戊午霽 豊津

十八日 巳未霽 有熟田社御奉幣百點入御

矢作宿邊左馬頭乘次朝臣亭

十九日 庚申 入夜雨下成一寃者御豐河驛

廿日 辛酉風雨 夜寃出於本野原甚雨暴風  
然而御輿前後入々者不及擁篲皆以絨鼻午刻以  
後屬晴酉刻擣本御宿

廿一日 壬戌霄 池田

廿二日 癸癸晴 懸河

廿三日 癸甲子晴 鳴田

廿四日 乙丑晴 蒲原 手越

廿五日 丙寅霧 御逗留蒲原宿駁依御不例也

廿六日 丁卯晴 未刻車送御宿

廿七日 戊辰霄 點澤竹下御宿

廿八日 己巳晴 酒匂驛濱部御所

廿九日 庚午 實剋別而雨而已三點屬晴酉

冠着御鍊倉廄所

三十日 十一月大

廿七日 戊子 入夜雪降於御所有和歌榔會前

武州被參真昭基經基政親行等爲其衆卑斐守參

秀經營有盃酒置物等云

廿八日 己亥 去十六日除日聞書到衆將軍家

有御覽若大將公即所被遣御賀孔也

廿九日 庚子天暑

今晚太白星祭以下被行御

祈等今將軍家御參鶴望八幡宮未剋御出

御東

芻維艷朝臣候頭閑周防守此特役御劍今夕地震

二十一癸卯 雪降

三日 甲辰 夜半以後雪及午刻天晴今晚北條左親衛爲見鳥立被行向大庭野三浦荷狹守同駿河四郎左衛門尉同五郎左衛門尉下河邊左衛門尉遠江三郎左衛門尉武田六郎小笠原六郎以下射手等多以被相伴云 日輪日頭傳極樂云 七日 戊申晴舊 今日評議之次就諸堂供僧等事有被定之旨是臨病患附屬非器物子又立名代之後落墮世間猶貪其利潤事向後可停止云 九日 丁庚戌天霽 午刻地震今日京都使者衆著去月廿三日改元啟嘉祐四年爲曆仁元年維範朝臣撰進之依獎惑變及此儀云 漢書王覽傳西

十二日 壬丑 大雪降照之後北條左親衛相異若狹守以下人之逍遙山內邊雉兔多獲之十四日 甲子 終日雨降今日評定御家人等不臨重病危急之期者不可讓所帶於妻妾之由被定云 其後通作前武則被參御所有恩澤沙汰基經素行之步與其步由劍樹石頭傳 十八日 己未 壬月六齋殿生禁斷事被仰下但阿海漁人為渡世計者訛制止之由 云 十九日 庚申 於御所斬分御方違事有其沙汰可被用遠江守名越宿所之由前武則令申給之處 清右衛門大夫季氏申云彼呼天一盜村方也可有憚云 被問陰陽頭維範朝臣公家之外不可有其憚

之由之仍治定名亭越云

云

廿三日甲子霄

成寃將軍家焉御方違入御遠

江守朝時名越亭是日來御本所也今日匠作注家

領處貟數配分給于子息等之大體內乞報申合前

武州必大有用捨事云

云

廿四日乙丑晴憚御退留遠州亭今日依為歸已

日也是無其之由陰陽道雖勘申之法性寺殿令

忌御間被追御佳例云

云

廿五日丙寅自名越還御遠州被進御引出物御敘

式部叅時章御馬遠江修理亮時幸同五郎時垂等

列之

廿八日己巳近作前武州遠江守右焉權頭駿

河守宮內少輔等被參右大將家二位家前右京兆等法華堂為歲末之故歛駿河前司毛利藏人大夫

入道甲斐守秋田城介參會云

廿九日庚午天曇成寃周防前同親實家燒亡

失火云

漢子等奏題卷第之十二

失失  
失失  
失失  
失失  
失失  
失失  
失失  
失失

也

守陽明大腸經圖

平人體敷在地

之少半長二寸

腰中一寸

腰中一寸

腰中一寸

腰中一寸

腰中一寸

腰中一寸

腰中一寸

腰中一寸

腰中一寸

下部  
上部  
中部

